

英語を学ぶ「英米文化学科」―英語を学び続ける 4 年間―

(『大学案内』にある、「英米文化学科」紹介ページとあわせて、お読みください)

高等学校の英語学習では「読む・聞く・話す・書く」の 4 技能の習熟が求められていました。「英米文化学科」では、それらの力をさらに伸ばし、卒業後の進路につなげます。

(以下の説明にある「〇〇〇〇」はすべて、開講されている授業科目です)

(高校生から大学 1 年生へ―4 年間にわたる英語学習の始まり―)

- ・基礎的な力を振り返り、強化することが、さらなる伸長を約束する
- ・英語との新たな出会い

専門教育の課程には、「英文法」があります。そこでは、高校までの文法をふまえ、大学レベルの高度な文法を学びます。4 技能は、ひとつひとつ特化した科目、すなわち、「スピーキング」、「リスニング」、「リーディング」、「ライティング」においてその力を伸ばします。さらに、教養教育の枠組みのなかには、多種多様な英語を学ぶ「英語」という名称の科目、実践的な場面での会話力を養う「中級英会話」、英語の音声上の特性を学ぶ「英語の音声の仕組み」などがあり、それらの科目は、英語力を総合的に高めることをねらいとし、かつ、これからの専門的な英語学習を下支えするものです。また、「TOEIC セミナー」、「TOEFL セミナー」、「TOEFL トレーニング」といった、外国人教師による各種資格関係の科目もこの時期から開講され、将来の海外留学や、卒業後の進路決定に備えます。なお TOEIC も TOEFL も、4 年間継続して大学内で受験できることから、長期的な計画のもと、高スコアを目指すことができます。

(2 年生・3 年生―英語専攻学生としての成長期―)

- ・より高度な英語力を獲得するための段階へ
- ・新たに出会った英語とのつながりを強める

英語学、英米文学、英米文化に関する学びが本格的に始まるのにあわせて、英語学習も高度化していきます。まず、『総合英語演習』という英語の運用能力を多面的に強化するプログラムが 2 年次から始まり、そこでは、卒業までの 3 年間、中上級レベルの英語を読みこなす力を身につける科目、各種資格試験での高スコアを達成するための科目、プレゼンテーション技術をみがく科目、学術的専門的な内容を英語で的確に表現する科目を履修します。そして上にも述べたように、この時期、英語学、英米文学、英米文化の 3 領域のより深い学習が開始されるわけですが、なかでも、「〇〇講読」と呼ばれる科目では、英語論文あるいは文学作品の原書を主な教材としており、つまり、専門的な知識の習得にあわせて、英語の高度な読解力を養成します。また、将来英語科教員を目指す学生にとっても、専門的な学びはこの時期から本格化し、「英語科教育法」、「英語科教育法特講」では、英語は教える対象

として新たな様相を見せ、そのことは、正しくも深い英語という言語の理解につながります。

(4年生から社会人へ—4年間の英語学習の完結と進路の展望—)

- ・高められた英語力の実践的な活用
- ・グローバルな社会へ旅立つ準備が整う

英米文化学科の全学生は、3年次に、英語学、英米文学、英米文化の3領域から独自に研究テーマを定め、2年間の研究を経て、4年次に卒業論文を提出します。これらの領域はいずれも、強調するまでもなく、英語と密接に関わっています。英語学は、一言語としての英語の様態を様々な角度から考察する学問です。またその領域には英語教育も含まれ、英語の特性を正確に理解したうえでの、効果的な教育方法を探究します。詩、演劇、小説といった、英米文学の領域で扱われる作品はむろん英語で書かれており、研究では、単なる内容読解をこえた、より深い分析考察が行われます。そして英米文化という領域は、英語を読み、聞き、話し、書き、英語で物事を考え、行動してきたひとびとが築き上げてきた種々の制度や歴史、その思想や映像表現などを研究対象として扱います。それから卒業論文のための研究では、英語で書かれた研究書や研究論文を読むことが欠かせません。そのように、卒業論文を提出する頃には、英米文化学科の英語学習も完結に近付きます。あわせて、卒業後の進路、すなわち4年間で向上した英語力に裏打ちされた進路もみえています。

「英米文化学科」での学びは、このように英語に貫かれているともいえます。また、実際多くの先輩がそうであったように、4年のあいだに留学支援プログラムを利用して海外留学を経験するならば、そのぶん英語力は確実に向上します。そして卒業後は、英語に関わる未来、つまり、培われた英語力を活かせる職業という未来が待っています。メーカーや流通といった、グローバルな事業展開をしている企業で働く、ホテル業界や旅行・運輸といった、日本を訪れる外国人をお迎えする仕事に就く、日本在住の外国人がより生活しやすくなるよう、公務員として自治体で活躍する、それから、英語を教える教員として、未来ある子どもたちとともに成長してゆくなど。強調するまでもなく、そのようなかたちで働く社会人は、英語という言語ならびに英語圏の文学、文化の学習により培われた知識や思考力を備えた、厚みのある人物です。国際社会で、また、異文化が接触する場面で重要視されるのは、個々の人間がもつそのような厚みです。なぜなら、それこそが、外国のひとびとが自分に対して寄せる信頼の根拠となるからです。繰り返しますが、そのように大切な厚み、それを教養と呼ぶひともいますが、それは、英米文化学科での学びを通して育まれます。英米文化学科での英語学習は、その点でも、卒業後の進路をしっかりとみすえた、実践的で、そして、言葉の真の意味での、充実した内容をもつ学びなのです。